
俺の先生

鏡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の先生

【NNコード】

N4352X

【作者名】

鏡

【あらすじ】

高校入学直前、両親が離婚！？

昔から仲の悪い両親を嫌う主人公・祐樹は独り暮らしをする兄・俊明の家に転がり込む。

だけど俊明も都合により県外へ引っ越しすることに…

仕方なく祐樹は俊明の知り合いの家に住ませて貰うことになった
が…

なんやかんやでゐるーへ生活する祐樹の物語！

是非！
w

プロローグ（前書き）

B-L作品！

なんか申し訳ないwww

『名も無き少女』と並行して連載するので
まちまちになるかも…
マイペースに待つてね！

プロローグ

「じゃあ俺は兄ちゃんとと」行く

3月のある日、ついに父と母の離婚が決定した。

昔から仲が悪くて兄と俺はそんな両親が大嫌いだった。学校から帰つてきても、聞こえるのは一人の怒鳴る声。「おかえり」なんてどのくらいきいてないだろう。

「俺は兄ちゃんと暮りす

どちらかの親と暮らすのだけは嫌だった。

俺の名前は『鶴田祐樹』（ツルタケウキ）

来月から高校入学。俺の入学する高校は多少レベルが高い学校で、バカの俺には入学は難しかつたが、必死に勉強し、見事合格。

そして兄の名前は『鶴田俊明』（ツルタケトシマキ）

現在25歳で、大学卒業後逃げるよつに家を出た。俺に「早く自立出来るようにな」と言い残して。

両親が仲悪かつたせいもあり、俺らはとても仲良しだった。

両親も俺が兄ちゃんと家に行くことに反対はしなかった。もちろん

ん兄ちゃんも賛成してくれて、俺は早速荷物をもって兄ちゃんの家にいった。

プロローグ（後書き）

さ、
次からが本題！

1・新居にて（前書き）

この回から本題とかいってたけど
まだっぽいね w

次かなー : w

1・新居にて

埃っぽい手をパンパン、と一回叩く。田に見えて、埃が舞つ。

「これで全部だ」

兄ちゃんのアパートに引っ越し完了。

「祐樹、終わった？」

部屋をひょいと覗いたのは、兄の俊明だった。それきまで出掛け
ていて居なかつたのだが。

「兄ちゃん！ 終わったよ！ ありがとな」

兄ちゃんはふにゃりと笑つて、「おー」なんて言いながら去つた。

片付いた部屋を後にし、兄ちゃんの部屋を覗く。兄ちゃんは着替
えていた。薄水色のワイシャツに青のネクタイ、ピシッとスーツを
着こなしている。

「仕事か？」

「そう、これからなんだ」

眼鏡を外してコンタクトをつける。個人的には、兄ちゃんは眼鏡
が似合う。

よし、と言、兄ちゃんは鏡から離れ俺の前に来た。

「悪いな、明日の朝まで帰れないんだ。晩飯、一人で食えるよな？
ぽん、と頭に手をのせられる。いつまでも子供扱い……なんだけど、
俺は兄ちゃんの手が好きだから構わない。

「大丈夫だ、心配すんな」

「ん、いいこだ」

くしゃくしゃと髪を乱される。俺はされるがままだつた。

「じゃ、行くな。寝るときは鍵確認しろよ」

忙しなく、兄ちゃんは出ていった。家に取り残される。…なんだか寂しい。

「あー、退屈だ」

自室に戻り、ベットに倒れ込む。天井の木目をぼんやり眺めた。引っ越しやなんやらで疲れていた俺は、うとうと微睡みかけていた……。

プルルルル
プルルルル

「うわつ！」

無人の家に鳴り響く電話のホールに俺は起こされた。慌ててリビングにある電話の受話器を取る。

「もつもしもし!」

『あ…あれ? 俊明…じゃないよな。だれ?』

聞き覚えのない、男性の声。

「あ、えと、にいちゃ…俊明の弟です」

『弟? そう。俊明は?』

「仕事です」

ふうん、と興味無さげに返事をする男。向こうも無言、俺も無言。重い空氣…。

切らうかなあなんて考えはじめた俺に、男が声をかけてきた。

『君名前は?』

見知らぬ人に名乗つていいのか迷つたが、よく考えたら兄ちゃんの知り合いか。

「祐樹、です」

『ユウキ君か。今いくつ?』

「15歳です。4月から高生です」

『S高?.....へえ』

男は意味有り気に笑つた。

『まあいいや。俊明帰つてきたら 神城から電話あつたよ つて伝
えといてくれるかな』

神城：恐らくこいつの名前。

「わかりました神城さん」

じゃあ、とお互いに挨拶を交わしたあと受話器を置いた。

俺はやはり疲れていたので、晩飯を軽く済ませ、そつそつと眠りについた。

2・#れか#れかの…（漫畫）

超展開をましたw
展開叶わぬにつかねからんべくなつてゐるw
許して

2・まさかまさかの…

目が覚めた。カーテンの隙間から朝日がじぼれている。ああ、朝だ。

のそのそとベッドから這い出る。少し肌寒い。

「ふああ…」

大きなあくびをして、リビングドボウツとしていたとき

「祐樹いい！マズイことになつたああーおきりおおー！」

騒々しいやつが帰つてきた。

「で？なんなんだ？一体。落ち着いて話せ」「せ

とりあえず兄ちゃんを着替えさせ、テーブルに座らせる。

「祐樹…ごめんな

俯いて咳かれても、中身を語ってくれなきゃ話にならん。

「なんなんだよ。さつさとと言えって」

兄ちゃんは俯いていた顔をあげ、俺を見た。うん、やっぱり眼鏡が似合つ男。

「俺、県外にじばられる

けんがい…？」

俺は何を言つているのか訳がわからなかつた。

「だから…引っ越さなきや」

兄ちゃんが申し訳なさそうに俯いた。今の兄ちゃんに獸耳をつけ
るなら、横に寝かせた犬耳だなあ。

「祐樹…お前はS高行きたいよな

「え、うん」

しょぼーん。今の兄ちゃんの効果音。なんてな。

「……S高……そうかS高か！」

あれ。横に寝てた耳が真っ直ぐになつた。なにか閃いたらしい。

「お前にびつたつのやつがいる…そこいつとこに住ませてもらひやー。」

冷静に考えてみた。さつきは何を言つてるか訳わからなかつたけど。

要するに、兄ちゃんは会社で県外に派遣?された。で、県外にいくなら引っ越ししなきゃならない。でも俺は高行きたい。つうか行く。なら兄ちゃんの知り合いにいい人がいる 居候。

「超展開すぎんだろおおおおおー!!!!!!」

あ、知り合いと言えば。

自室のベッドで「口 口 口」してた俺は立ち上がり、兄ちゃんの元へ。

「なあなあ。神城さんから電話あったの忘れてた」

もつ県外行く気満々の兄ちゃんは、自分の荷物をまとめていた。

…俺、また引っ越し?

「ん? そつか! ありがとな」

兄ちゃんはそそくせと立ち上がり、リビングの電話へ。

別に、男同士の電話内容に興味はなかったので、部屋に帰る。仕方ないから荷物をまとめた。じついう場合、親に連絡は……いいか。どうせ知らない顔されるし。

来て1日でまた居なくなるなんて、どんなに忙しないんだ俺は。昨日整頓したばかりの荷物をまとめながら、しみじみ思った。

3・電話の相手

連れられた場所は、S高から徒歩35分のところにある、ちよつと大きい家。

「俺の友達ん家。ここに住ませてもらう」
ぽんと背中を叩かれても…。展開が早すぎやしないか?
なんでも、兄ちゃんの引っ越し先は会社が手配していたみたいで
いつでもOK状態らしくて、向こうに馴れる為にはなるべく早い方
がいいわけで。

今に至るのか。

ピンポン

兄ちゃんの指がインタホンを押した。数秒、間があつて聞いたことある声が。

「おいーっす……なんだ、俊明」

ドアを開けながら氣だるそうに言つ男。聞いたことある声、……?

「わりいな隼人。こいつ、祐樹」

ちら、と細い目でこちらを見る。ふ、と口元を歪めた。

「こ前の電話の……。はじめまして」

電話の…?

あつーこの人 神城 !?

「俺、神城隼人。よろしくな」

す、と右手を差し出された。俺もあわてて右手をだした。握手。

「じゃ、隼人よろしく!もう電車時間だから行くな!祐樹、すまんな」

最後に兄ちゃんは、俺の頭を撫でていった。兄ちゃんの後ろ姿を見送る。

「さ、入りなよ。少し冷える」

神城さんに促され、俺は中へ入った。

神城さんの家は広かつた。簡単に家のなかを案内してくれたあと、俺の部屋に連れられた。俺の部屋は一階だった。

「ここは君の部屋。自由につかいな。もちろん家中も自由にな」

「あつありがとうございます」

神城さんは少し笑って、部屋から届なくなつた。肩から提げていた大きなカバンを床におろす。

「広いなー」

俺の部屋も、それなりに広い。とりあえず俺は、荷物の整理にとりかかつた。

「なに? バイトするの?」

晩飯中、神城さんとの会話。

「はい、まあ。居候をせてもらつてる訳だし、生活費とか俺の分は払いますから」

神城さんは箸を置いて一息ついた。

「こりない

俺を見て言つたから飯の話ぢやないんだろ？

「へ…？」

「金はいらない。別に、不自由してないから」

おお金持ち発言。

「まあバイトしたいならいいと思つたけど、いふ高生なら勉強は怠るな
よ」

「わかつてますよ

神城さんはにこりと微笑み、また米を咀嚼し始める。
笑顔に少しきゅんとしたのは、内緒。

3・電話の相手（後書き）

カミシロハヤト
神城隼人
俊明と同い年

4・新学期（前書き）

この回から
話が動きます。w
書いて楽しいw
続き早く書きたいぜw

「ほら起きた祐樹！入学式！」

勢いよくめくられた布団の中で、俺は丸まっていた。

「神城さん…乱暴だよ」

朝日と神城さんの視線を浴びながら、眠い目を擦る。上体を起こし時計をみると、まだ6時。

「…つか、早くね！？」

入学式は9時からなんだけど。

「早くない！これからは毎日6時起きなんだから、習慣付けだつ」
そういうて俺の両頬をペチペチ叩いた。仕方なく、のそのそとベットから降りる。…う、寒い。

「朝飯作ってるから、さっさと準備しろよなー」

忙しなく、神城さんは一階へいった。仕方なく、俺は制服に着替えた。

新品のブレザー。身に纏うと眠気が一気にとんだ。

「うしつ…！」

気合いの一言。駆け足で階段を降りる。あ、いい匂い。
リビングへ行くと、神城さんが料理中だった。

「いい匂いだね」

俺に気づいた神城さんが振り向いて、俺の制服姿を眺めた。
「やっぱ祐樹、似合つてるな」

そして優しく微笑んだ。とても嬉しい。

「朝飯、もう少しだから。顔洗つてこい」

頷いて洗面所へ向かう。鏡の前に立ち、自身の顔を見る。

「うわ、カッコ悪」

多大な数の妖怪アンテナが、ひとまずブレザーを脱ぐ。この寝癖は水で直るのか…。

蛇口を右に捻る。勢いよくでたぬるま湯で手を濡らし、髪に馴染

ませる。なおの気配なし。この量の水じゃなおらないと察知し、蛇口の横にあるミニシャワーを手に取る。

「んぢは蛇口を左に捻る。シャワーからぬるま湯が勢いよく出る。よし、これなら頭とつこでに顔も洗える。

「……長いと思つた。シャワーかよ」

一心不乱に髪を洗つていた俺に声をかけたのは神城さん。

「あ…ごめん。寝癖ひどくて」

蛇口をひねり、水を止めた。タオルで頭と顔を拭きながら苦笑い。と、謝罪。

「構わんが。飯」

「うん。ありがと」

まだ湿つてゐる髪を整え、ブレザーを羽織る。神城さんの後についてリビングへ。

「うまそお！」

まあいつもあまりかわりない朝食。テーブルの上には田玉焼きとワインナー、豆腐の味噌汁と白米。日本の朝食。美味そう。

「ほら座れ」

そそのかされて食卓テーブルに座る。神城さんは俺の前に座る。この生活も、すっかりなれたもんだ。

「いただきます」

一人声をあわせて合掌。熱々の味噌汁を啜る。

「ん、うまー」

俺の言葉に笑顔で答える神城さん。それから神城さんも味噌汁を咀嚼。

二人黙々と食べ続ける。会話はない。いつもは俺がなにか話をすらんだけど、今日はなんだか緊張して話せない。

「今日しずか」

神城さんが俺を見る。

「いやなんか…緊張してて」

くすりと神城さんは笑う。なんつうか、純粹な少年みたい。

「落ち着いとけよ。あんま固いと疲れるし」

神城さんが箸を置いた。皿を見れば、もつきれこさっぱりなものない。

「はや……」

思わず口から言葉がでる。

「今日は仕事早いから」

流しに食器を置く。洗わずに、洗面所へ。

「ふーん……」

俺もさつとと食つちやおう。ゆっくりしたいし。

箸を動かすペースをあげる。皿の上の食べ物が徐々に消えていく。

「俺もう行くなー。鍵ようしきゅう。時間あるなら、食器もよひしきゅう」
そう言い残し、神城さん出勤。時計を見る。7時15分。いつも
は8時とかなのに。

俺は一人分の食器を洗いながら考えた。

そういえば俺って、神城さんが何してる人か知らなかつた。仕事
行くときはスーツだし、荷物もそんな無い。そんな職業たくさんあ
んだろ。見かけだけで当てるなんて無茶な。
まあいいか。神城さんが帰つてきたらゆっくり聞こいつ。
そうして俺は学校へ向かつた。

S高。俺が夢にまでみたS高。やつとの日の日が来た……！
玄関に貼つてあるクラス割りで自分の名を探す。俺は1年4組。
このS高には中学の頃の友達はいなかつた。知つた顔のやつはい

ても、喋らないやつばかり。新しい人間関係づくりに、胸を膨らます。

控えめに、教室の戸を開ける。教室の中には半数くらいの人気がいた。教室の戸に貼つてあつた座席表通りの席にすわり、鞄を横にかける。予想外に賑わっている。

なんと俺の席は窓側で、授業中でも外が見える。退屈しなくていいな。

俺が何気無く窓の外を見ていた時だった。

「よつよ。お前どこ中？」

前から声をかけられた。驚いて声の主を見る。誰がみてもイケメンと答えるであろう、爽やかくんがいた。

「え、B中…」

「まち？ 近いな！ 俺Ｋ中だつた！…」

「ひつと白い歯を見せて笑う少年。ハートを撃ち抜かれそうだつ

！」

「俺、タカシマナツキ高島夏輝よろしく」

右手を差し出されたので俺も右手を出す。互いにぎゅっと握る。

「俺は鶴田祐樹。よろしく」

こんなすぐに友達らしきものが出来ると思つてなかつたから面食らう。

軽い自己紹介を終えた俺たちの耳に校内放送が。

『新1年生の皆さんには廊下に出席順に整列後、第1体育館へ移動してください』

「うーわ。入学式かあ…俺寝ちゃうかも」

高島が笑いながらぼやいた。確かに退屈だよな…。

そして俺たちは体育館へ移動し、退屈な入学式に参加した。

「うわーつかれたっ！」

教室に戻った高島の開口一番がそれかよ。椅子の上で大きくノビをしている。

「校長、話長かつたな」

なんて入学そろそろ校長の悪口を言つて盛り上がっていたとき、教室の戸が勢いよく開いた。

「うおっ！あれ担任じやね！？」

ひそつと耳打ちする高島。入ってきた男は黒板前にある教卓の前に立つた。

「じゃ、相川くん。挨拶しようか」

騒がしかつた教室も、男が入ってきた為静かになつていた。男は出席番号1番の相川に号令を求めた。

俺の心臓が、おおきく脈打つ。

そんなはずは…と思考が止まる。

「あ…きりーつ」

相川の号令に従つて皆立つ。俺もつられて立ち上がる。

「気をつけ、おはようございます」

クラス全員が挨拶をするなか、俺は目を丸くしたまま立ち竦んでいた。

「着席」

ガタガタと騒がしく音を立てて皆が座る。もちろん俺も。

「　　はい。皆入学式お疲れ」

男が話始める。その声はとても聞き覚えがあつて

「俺はこのクラスの担任になる、神城隼人だ」

時と思考と息が止まつて。

……俺はなにを見ているのか理解していなかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4352x/>

俺の先生

2011年10月27日09時12分発行